ネパールでホームステイ体験して思うこと

木村　洋

株式会社長谷工コーポレーション　技術研究所
〒186-0005 埼玉県越谷市西方2968

貧困のネパールの山岳地帯で，20年近く村人とともに生活し，支援活動を続けている垣見一雅氏（通称OKバジ）を訪ねて，一昨年と昨年の12月，ネパールのサチコール村を訪ねた。12月の気温は，日中は15℃前後，夜は5℃前後まで下がる。ネパールへの直行便はなく，飛行機と車を使ってOKバジの家のあるドリマラ村まで，日本を離れてから2日間要する。

OKバジの住まいは，ベッドはゴザとその上にアルミのクッションを敷いているだけ。布団らしきものはない。毎日のように村々を渡り歩く生活で，自宅でくつろぐことはほとんどないようである。（写真はOKバジ，右奥がベッド）

ドリマラ村より先は，徒歩で3時間歩いてサチコール村に到着。電気もガスも水道もない村だ。現地では，ホームステイによって交流を深める。夕食は，かまどのある土間に敷いたゴザに腰を下ろして食事をする。かまどが台所であり，ストーブであり，照明になる。写真はホームステイをしたお宅での記念写真である。右手にあるのがかまど。

食事が終わると個室で早めの就寝となる。個室には家族用のベッドと毛布があるが，我々が毛布を使うと家族の誰かが寒い思いをするので，毛布は返し，ベッドの上で寝袋に入って寝る。

部屋には窓があるが外気が入ってくる。日本人は，与えられた毛布だけでは，寒くて眠れないだろう。日本では湯につかって体を温めて床につくものを，ここでは水道はなく風呂に入る習慣もない。日本人には，過酷なライフスタイルである。

しかし，ネパールの住宅，住まい方は，なんとなく懐かしい気がする。日本の住宅は，高気密高断熱化し，快適な温熱環境が形成され寿命も延びた。それは，つい最近のことである。我々の近い先祖は，この村と同じような環境の中で暮らしていただろう。

現代の住宅もさらに進化する。そのときに大事なのは住まい方であろう。気密性が増せば室内のVOCや燃焼ガスの発生や除湿・加湿に配慮しなければならない。空調機器の運転も機械任せにしないで，通風を取入れたり，適切な温湿度設定が必要になる。照明器具のON/OFFもまめさが必要だ。IT技術の発展に伴って，機械が何でもやってくれるようになりつつあるが，人が自分で考えて操作する能力は奪ってほしくないものである。